

## 令和5年度第3回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：令和6年1月29日（月） 午後3時～5時

■開催場所：京都市役所本庁舎4階 正庁の間

■議題：

- (1) 市民参加の裾野拡大の進捗について
- (2) 「市民参加推進力」指標について

■報告事項：

新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に係る新しい事業等

■公開・非公開の別：公開

■出席者：市民参加推進フォーラム委員 13名

（荒木委員、乾委員、金田委員、篠原委員、白水委員、並木委員、原田委員、峯委員、平田委員、松井委員、三宅委員、森川委員、森実委員）

■傍聴者：なし

■特記事項：

動画共有サイトYouTube（ユーチューブ）を利用し、後日、音声配信を実施する。  
Zoomを用いたWeb会議と併用開催した。

【議事内容】

### 1 開 会

### 2 委員紹介

### 3 議 題

議題（1）市民参加の裾野拡大の進捗について

<森川座長>

- ・ それでは、早速議題に入る。「市民参加の裾野拡大の進捗について」事務局から説明をお願いします。

<事務局>

(資料1「市民参加の裾野拡大について」説明)

<森川座長>

- ・ まずは、西京高校との連携について、10月27日の最終発表会を見学された方から、当日の様子や感想を共有いただきたい。

<荒木委員>

- ・ 当日は、広い教室で多くのグループが同時に発表する方法で実施され、高校生も積極的に取り組まれていた。忙しい中、現地調査に行ったグループもあり、しっかりと調べておられた。
- ・ また、良かったと思うのは、授業の前半で京都市の観光政策の職員が、担当者として業務で感じる肌感覚を含めて話していたことや、データ等の資料を提供されていたことである。高校生がより具体的に考えるきっかけになったのではないかと思う。
- ・ 意識の高い生徒でも、日々そこまでしっかりとニュースを見ている高校生はいないと思う。京都市職員のコメントの中で、国の方針などの時事関係の話題にも触れられていたことも良かった。

<金田委員>

- ・ 生徒の発表に対して、大人がコメントや評価を行い、高校生とは別の視点から問いかける仕組みが面白いと思った。これまで市政に関心があった高校生は少ないと思うが、今回の授業のようにテーマ設定し、自分たちで調べるという過程の中で、座学だけでは得られない学びがあったのではないか。
- ・ 1回の授業では、実際に参加したいという質問項目のアンケート結果にすぐに反映されるのは難しいと思うが、このアンケート結果の数字に結び付くように考えていくことで、フォーラムで取り組んでいる市民参加の裾野拡大につながると思う

<森川座長>

- ・ 西京高校の生徒は、2箇月間で取り組んだと聞いている。高校生の取組としては、短期間で非常によく調べられている印象であった。
- ・ アンケート結果を見ると、まちの課題に関心を持った人は増えたが、実際に参加したいという割合は3割程度で、割と正直に回答してもらっているのではないかと思う。この数字を少しでも参加したい人が増える方向にシフトするように考えていく必要がある。
- ・ 以前から、この高校連携授業の取組をロジックモデルに当てはめて評価してみようという議論になっていた。

<並木委員>

- ・ 西京高校の最終発表会に参加した。今後の展開で考えたほうが良いと思うのは、学校内に留まり過ぎず、外に出る仕組みにしていくことである。学校からの聴き取り結果に、校外に出て一般市民を対象に聴き取り調査を行うことは安全管理上困難と書かれていたが、道行く人へのインタビューではなく、今回のような現地調査であれば問題ないかと思う。やはり実際に現地に赴き見聞きすることが効果を生むのではないか。
- ・ また、高校生自身が取り組むだけではなく、実際に取り組んでいる職員や団体に話を聞く機会をもう少し設けても良いのではないか。今回は市職員がその役割を担ったが、例えば、前フォーラム委員の菅谷さんのように住民自治に意欲を持って取り組む先人の話を聞くことで、高校生も影響を受けるなどより充実した内容になると思う。

<森実委員>

- ・ アンケート結果を見ると、実際に参加したいという数字が伸びていないことが課題である。具体的に参加するところまでの体験をステップとして組み込まなければならない。
- ・ 京都市の「みつけ隊アプリ」は、登録者が5,000人を超えており、道路の損傷箇所の登録も多数集まっていると聞いている。自分の登録した内容が、道路の改善につながる仕組みが面白いと思う。高校連携の取組においても、スマートフォンやアプリの活用などを通じて、実際に参加し、提案が実現する体験ができる仕組みの工夫が必要だと思う。

<森川座長>

- ・ 一旦、京都奏和高校の取組の共有に移りたい。

<篠原副座長>

- ・ 京都奏和高校の「ビジテックⅢ」という3年生の授業に関わっていた。「ビジテックⅡ」には、白水委員が関わっておられる。
- ・ 京都奏和高校は開校から3年目の新しい学校であり、不登校を経験したり、学校生活に困りを抱えている生徒が通っている普通科定時制高校である。大半の生徒が専門学校に進学するか就職するという意味でも西京高校とは異なった特徴がある。

<白水委員>

- ・ 2年生の「ビジテックⅡ」では、前期に総論的なまちづくりについて学んだのち、高齢者の方に実際にインタビューをして取組を企画し、後期は実践していった。このような積み上げがあったのちの3年生の授業になるため、課題の抽出方法や企画への落とし込み、ニーズにどのように反映されるかなどは体系的に学ばれていたと思う。

<篠原副座長>

- ・ 市民参加の裾野拡大という意味では、生徒たちが取り組んだプロジェクトの内容にもよるが、生徒本人には参加している実感はないのではないかと思う。しかし、仮説をたて、現地調査をするなど、その過程で結果的に市民参加を経験できていたのではないかと思う。

<白水委員>

- ・ 今回は、担当教員が熱心だっただけでなく、篠原副座長のコーディネートや、京都市側の関与などコーディネート機能が充実していた。今後の展開でコーディネートの省力化を検討する上では、外部の人の参画だけではなく、教員向けの研修を手厚くするという方法も考えられるのではないか。

<篠原副座長>

- ・ 今回の授業では、京都市側も月例会に出席するなど、かなり丁寧にコーディネート機能を果たしていた。今後、省力化にあたっては、このコーディネート機能が無くなってしまふと回らないと思う。その部分については、展開するうえで考えなければならない。

<事務局>

- ・ 今回は、西京高校も京都奏和高校も非常に熱心な先生だった。しかし、教育委員会からは教員の働き方改革という意味で、労力の省力化に配慮する意見もあった。今回のトライアルで得た知見としては、学校側の理解はもちろん、教員個人にも連携授業の意義を理解してもらえれば、非常に柔軟に対応していただけることがわかった。

<森川座長>

- ・ 今回は、幸いにも担当の教員が積極的だったということである。今後の展開を考えると、先ほどの白水委員のご発言にもあった、教員に向けた研修などの働きかけや高校との関係づくりも検討したほうが良いのか。

<事務局>

- ・ 今後は、各高校の教育方針の聞き取り等、ニーズを把握しながら丁寧に展開していきたい。その方法は検討中である。

<篠原副座長>

- ・ 今後の展開でいうと、希望のある高校だけに広げていくのか。フォーラムとして、連携授業の取組がロジックモデルでの評価で効果があるものなので、積極的に広げていくのか。

<事務局>

- ・ 後者の方である。希望がある高校だけではなく、積極的に展開していきたい。しかし、全ての学校に画一的に広げるだけでは広がらないと考えているため、教員の理解を得ながら丁寧に広げていきたい。
- ・ 連携授業は高校に強制するものではないとは思っている。しかし、この取組による市民参加の裾野拡大への有効性があるのであれば、ノウハウを属人的なものではなく、マニュアル化することなども取組を広げていく上では必要だと考えている。

<白水委員>

- ・ これまで自身関わってきた高校連携授業へのコーディネートの支援内容を振り返ると、コーディネートスキルそのものが、教員にとって有用なスキルとして研修に組み込まれても良い内容ではないかと思う。

<森川座長>

- ・ それは、教員にコーディネート機能を担ってもらわないと難しいということか。

<白水委員>

- ・ 市立の9校だけであれば、京都市でコーディネートできると思うが、これを府立高校や私立高校に広げていくことまで考えるとすれば、各校の教員もある程度できると、この取組が定着しやすいのではないか。

<事務局>

- ・ それは、京都奏和高校で実施したオーダーメイド型の連携授業についての話か。

<白水委員>

- ・ その通りである。

<森川座長>

- ・ 本日の議論を踏まえて、来年度以降の展開の検討を事務局にはお願いしたい。

## 議題（２）「市民参加推進力」指標について

<森川座長>

- ・ それでは、議題（２）「市民参加推進力指標について」、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

(資料2「市民参加推進力」指標、資料3「ロジックモデル」説明)

<森川座長>

- ・ モニター調査の方法が変更になったとのことであるが、どのような影響があったのか。

<事務局>

- ・ 以前は郵送で調査していたため、比較的高齢で熱心な方が多く回答される傾向があった。しかし、インターネット調査に変更になり、人口分布と同じ比率で抽出された対象者から回答を得ることで、若い世代からの回答が多くなったという影響がある。

<乾副座長>

- ・ ロジックモデルというのは、事前に仮説した因果関係を基に評価するという理解で良いのか。

<並木委員>

- ・ その通りである。

<乾副座長>

- ・ それを前提に考えると、今回は最初に仮説をたてられなかったため、後からロジックモデルとして指標を考えることが難しかったのではないかと思う。

<並木委員>

- ・ 事業計画を策定するタイミングで、仮説に基づきロジックモデルを作るのが本来は望ましい。
- ・ 今回の高校連携授業の取組であれば、やってみないとどのような効果が出るか分からないという面もあったため、トライアルで効果等がある程度見えてきた状況で、本格的に展開する際にロジックモデルを考えたほうが、より精度の高い指標になる。
- ・ 事務局から説明のあった資料については、例えば資料2の3ページ目で、本当にこの取組が着実に実施されたのかをアウトプットで確認し、その取組の効果があったのかを短期アウトカムで確認していくという視点で考えて、指標の情報が充分であるかという部分を検討していくのが適切かと思う。

<森川座長>

- ・ 13の施策の指標の1つ1つを丁寧に検討することは、フォーラム会議の時間中では難しいと思うが、この考え方で評価する全体的な仕組みに対してご意見をいただくことで事務局の作業をより充実させられるようにしていく方向性が良いだろうか。

<並木委員>

- ・ 例えば、施策10を見ると、市民生活実感調査の結果が当てはめられているが、計画の施策10の推進例として記載されている内容から考えると、今回の裾野拡大の取組の結果を当てはめるということも考えられると思う。このように、市民参加推進計画と照らし合わせていくと指標の妥当性を検討しやすいと思う。

<乾副座長>

- ・ 今回は、アウトプット指標を事務局で検討しているが、市政参加の理想は、その部分にも市民が参加して検討していくことであると思う。

<原田委員>

- ・ 指標として当てはめている数字の妥当性について質問したい。施策1に「京都市情報館」のビュー数を当てはめることは適切なのか。地域を限定したユニークユーザー数を当てはめるのが適切ではないかと思う。
- ・ 今後も、こちらの数値を当てはめるほうが適切ではないかという状況が出てくると思う。その際に指標を見直し、適切な指標へと変更していくことを共通認識として持っておいたほうが良いのではないか。

<森川座長>

- ・ 指標のブラッシュアップを事務局だけが担うのか、フォーラムで行うのかも工夫しなければならぬ。1つずつ深掘りして検討しようと思うと、フォーラムの本会だけでは難しいかもしれない。

<篠原副座長>

- ・ 先ほど森実委員が紹介されていた「みっけ隊アプリ」への市民からの登録件数は、良い市政参加の指標になるのではないかと思う。しかし、これがどの施策に当てはまるのかという個別具体の話になると、森川座長がおっしゃる通り本会の時間だけで検討するのは難しいかもしれないと思う。

<森実委員>

- ・ 施策のいうのは、ある意味では、取り組めば進むものである。事業の継続性も大切ではあるが、計画期間ごとに目標を達成すれば、実施対象を変更するなどの状況も発生するため、変化に合わせて都度検証していくことが重要ではないかと思う。

<白水委員>

- ・ 例えば、市民参加の裾野拡大については、インプットから評価の部分までを高校生など当事者の世代に考えてもらうということも可能ではないかと考える。

<森川座長>

- ・ ロジックモデルを活用し、関係者が一緒に考えるプロセスを経ることで取組がより良くなるということも、以前、並木委員がお話しされていたように記憶している。

<白水委員>

- ・ それを考えるコンテンツを高校連携授業の1テーマに入れられるのではないかというアイデアである。

<森川座長>

- ・ 評価の1つの事例として、資料3「市民参加の裾野拡大に係るロジックモデル」のとおり、高校連携授業を当てはめて作成されているが、その妥当性についても検討したい。質問やご意見はあるか。
- ・ インプットの条件に記載されている内容は、取組の質を高める条件に通じるものとして書かれているのか。

<事務局>

- ・ 高校連携授業で注意する点を言語化して記載している。

<並木委員>

- ・ インプットは、一般的なロジックモデルではヒト・モノ・カネを入れることが多い。今回の場合は、市職員や地域の人の参加数にあたる。それに加えて、連携授業をうまく進めるための細かな取組や条件が書かれているのではないかと理解している。

<篠原副座長>

- ・ それであれば、西京高校も京都奏和高校もいくつかのグループ・プロジェクトに分かれて取り組んでいたが、その数もアウトプットになり得るということか。



<並木委員>

- ・ それもアウトプットにすることができる。他にも、高校生が何回地域を訪問したかといった数字もアウトプットと考えられる。

<乾副座長>

- ・ 例えば、高校連携授業のパッケージを作り、学校に丁寧に説明する、あるいは協働を呼びかけるということをインプットとして設定し、その結果、何校が説明を聞いてくれたというレベル感のロジックモデルでも問題ないのではないか。

<並木委員>

- ・ 高校連携授業を増やすための事務局やフォーラムの取組の評価としては、そのようなロジックモデルがあっても良いと思う。

<乾副座長>

- ・ 今回の取組では、パッケージを作るまでのトライアルや事前の準備部分にもかなり時間をかけて丁寧に進めてきているため、その部分もロジックモデルに含むことで、着実に進んできていることが評価できるのではないかと思う。

<三宅委員>

- ・ 京都市としての取組を評価する指標であると思うが、例えば、実際に大学生が地域のまちづくり活動に参加しているような数字を拾うことはできないのか。地域のまちづくり活動に参加している大学生が身近に増えていっている印象があるので、そのような数字を評価できたほうが実態に即しているのではないかと思った。

<篠原副座長>

- ・ その視点もとても重要だと思う。

<三宅委員>

- ・ 市民生活実感調査は、無作為調査だと思う。ただ京都に住んでいるだけで、全くまちづくりに目を向けていない人が多く含まれている。それがリアルな実感の数字であると思うが、自発的に取り組んでいる人の数を拾い評価されるほうが、実際に活動している若者も嬉しいので、そのような視点で評価する項目があっても良いのではないか。

<並木委員>

- ・ 市民参加の裾野拡大のロジックモデルについて、今は京都市が目指すものを指標に入れており、計画の進捗としてそれはミニマムに測れば良いと思う。一方で、地域に調査に

行って、意識が芽生えたことや地域に愛着・関心が沸いたことなども測ることができれば、今後、高校連携授業を広げていくにあたって、授業の効果を伝える材料となる評価もできるのではないかな。

<森川座長>

- ・ 計画の評価としてだけでなく、1つ1つの取組の評価としての使う可能性もあり、今後もロジックモデルのブラッシュアップの方法も含めて使い方を検討していかなければならない。

<平田委員>

- ・ 今回のトライアルでは熱心な教員の方が多く、今後の連携授業の展開についても色々なお考えがあるのではないかなと思う。今後も定期的に意見を聞く場を設けることができれば面白いのではないかな。

<松井委員>

- ・ 今年度は、高校生への市民参加の裾野拡大に特化していたが、実際に地域で活動する立場としては、地域活動への参加が少ないという課題感とはギャップがあるように感じてしまった。現場の課題感との乖離を含め、丁寧に検討を進めたいと思った。

<峯委員>

- ・ 初めて会議に参加させていただいた。今後も積極的に議論に関わっていききたい。

#### 4 報告事項

##### 報告事項（1）新たに設置された附属機関等に係る協議結果及び市民参加に関する新しい事業等

<事務局>

（資料4「新たに設置された附属機関等に係る協議結果（一覧）」、  
資料5「市民参加に関する新しい事業や取組」報告）

<森川座長>

- ・ 本日の議論は以上となる。それでは、事務局にお返しする。

#### 5 閉会

<事務局>

以上をもって、市民参加推進フォーラム令和5年度第3回会議を終了する。本日はありがとうございました。 以上